

井野長割遺跡現地説明会資料

遺跡の概要

井野長割遺跡は佐倉市の北西部、印旛沼に注ぐ手繰川左岸域の標高約27mの台地上に立地し、遺跡の一部は佐倉市立井野小学校の敷地内に位置しています。昭和44年以降8回の調査が行われ、縄文時代後・晩期（今からおよそ4,300～3,000年前）の遺構・遺物が発見されました。調査はトレンチと呼ばれる幅2mほどの細長い溝を掘り下げる部分的なものであり、遺跡の全容を解明することは難しいですが、調査の積み重ねによって井野長割遺跡の特徴が徐々にわかってきました。この遺跡を最も特徴付けるのは「環状盛土遺構」と呼ばれる遺構です。盛土とは縄文時代の人々が土を盛り上げて造った高まりのことで、環状盛土遺構は遺跡中央の窪み（中央窪地）に沿って盛土が環状にめぐる遺構です。盛土遺構自体は北海道では縄文時代の早い時期に認められます。青森県三内丸山遺跡では中期の大規模な盛土遺構が見つっていますが、縄文時代後期以降の関東地方では盛土が環状にめぐることが大きな特徴です。しかし、井野長割遺跡のように盛土が良好な状況で残っていることは極めてまれです。遺跡西側の井野小学校敷地内にも盛土が存在していたのですが、学校建設時に削られて無くなってしまい、その正確な範囲はわかっていません。盛土と窪地の形はともに南北に長い楕円形と推定されます。長軸での盛土の直径は約160mで、内側の中央窪地の直径は80mほどと推定され、国の史跡である栃木県小山市の寺野東遺跡の環状盛土遺構とほぼ同規模になります。また、盛土と窪地の高低差は1.5～2mにもなります。このような盛土遺構は「記念物（モニュメント）」と呼ばれ、夏至や冬至などの太陽の出没点や山などの位置を意識して造られたという考えがあります。また、盛土下および盛土中では住居跡が確認されることから、新しい住居を建てるための整地として盛土が行われたという考えもあります。いずれにせよ、このような巨大な構築物をつくることや大規模な整地行為には多くの人々が関与していたものと考えられます。

井野長割遺跡関係年表

*色付け部分が井野長割遺跡の時代

旧石器時代	縄文時代						弥生時代	古墳時代
	草創期	早期	前期	中期	後期	晩期		
	BC12000	BC7000	BC4000	BC3000	BC2000	BC1000	0	AD300

井野長割遺跡調査史

調査次	年次	団長・団体（当時）	検出遺構等
発見	昭和44年(1969年)10月26・28日	慶応義塾大学・近森正 講師	西側の盛土部分の調査。ヤマトシジミの貝ブロック5ヶ所、炉跡7基
第1次	昭和45年(1970年)7月16日～31日	慶応義塾大学・清水潤三 教授	西側の盛土部分の調査。晩期中葉の住居跡1軒検出。
第2次	昭和48年(1973年)3月20日～23日 4月6日～26日	慶応義塾大学・清水潤三 教授	南側盛土（マウンド5）の調査。盛土下から後期中葉の住居跡2軒、後期前葉の住居跡1軒。また、盛土南裾から後期中葉の土器塚検出。
第2次	昭和50年(1975年)	東京大学・鈴木尚 名誉教授	南側盛土の調査。1973年の調査の追加分。詳細不明。
第3次	平成10年(1998年)1月6日～30日	(財)印旛郡市文化財センター	遺跡南側の調査。縄文時代の遺構は発見されなかった。
第4次	平成13年(2001年)2月20日～4月12日 6月1日～21日	(財)印旛郡市文化財センター	盛土の残る遺跡東側～谷部分と南側の調査。住居跡1軒、ヤマトシジミの貝塚1ヶ所。土坑10基。ピット等。谷の埋め立て判明。
第5次	平成14年(2002年)3月1日～29日	(財)印旛郡市文化財センター	遺跡北側の盛土の調査。住居跡1軒。ヤマトシジミの貝塚1ヶ所。縄文後期土坑10基。ピット多数。盛土部分の解明。
第6次	平成14年(2002年)11月28日	佐倉市教育委員会	西側推定盛土部分～その外側への調査。住居跡2軒。遺構の分布から西側盛土の限界が判明。
第7次	平成15年(2003年)3月3日～20日	(財)印旛郡市文化財センター	中央窪地部分西側の調査。住居跡3軒。土坑9基。ピット37基。炉跡3基。中央窪地が関東ローム層を削って形成されたことが判明。
第8次	平成15年(2003年)8月1日～28日	(財)印旛郡市文化財センター	今回の調査。学校建設により消滅してしまった西側盛土部分の調査。道路状の空白をはさんで住居群と土坑群が検出された。

第1次調査 [昭和45年(1970年) 7月16日～31日]

昭和44年の井野小学校建設工事中に大量の縄文土器片が発見されたことによって、この遺跡の存在が確認されました。そのときに慶応大学、佐倉市史編纂委員会によって緊急調査が行われ、この遺跡が縄文時代後・晩期の集落跡で、一部に小貝塚をとまなうことが判明しました。

この結果を受け、昭和45年7月に井野小学校敷地内で慶応大学によって発掘調査が実施されました(第1次調査)。この調査は集落の構成とマウンド状の構築物(盛土のこと)の性格を明らかにすることを目的に行われました。その結果マウンド状の構築物のいくつかが縄文時代のある期間に継続的に作られた可能性が強まりましたが、その性格を明らかにすることはできませんでした。晩期の遺跡発掘調査例が少なかった当時において、珍しいマウンド状の構築物の作られた時期がある程度わかったことなど、この調査は晩期の研究にとって貴重な資料をもたらしました。

第2次調査 [昭和48年(1973年) 3月20日～23日、4月6日～26日]

井野小学校のプレハブ校舎増改築の計画にともない、学校敷地の東側に残されていた「マウンド状遺構」(概報の用語に基づく、「マウンド5」現在の体育館部分)の事前調査が慶応大学によって実施されました。

まずマウンド状遺構の測量調査が実施され、その後マウンド状遺構を半分に分断する形で調査が行われました。

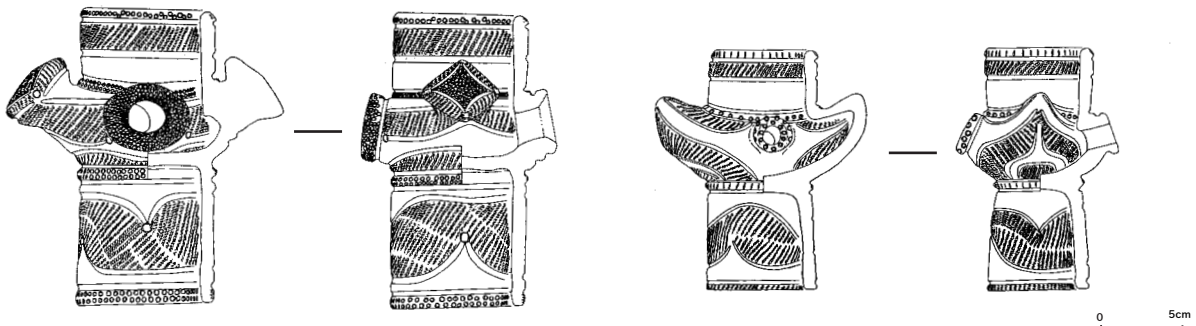
マウンド状遺構は直径約30mで、高低差が2.5mほどの円形をしていました。半分に分断した土層断面を見ると、20～30cmの表土の下にある厚さ30cmほどの暗褐色土層の下に「ローム質黄褐色土」(概報の用語に基づく)という関東ロームに類似した土が存在し、マウンド中央では1.3mほどの厚さで、周辺部にいくほど薄くなる凸レンズ状の堆積をしていました。その下には褐色土層がほぼ水平に堆積し、その上面で炉跡や後期の大きな土器片が見つかることから、この土層の上面が後期の人々が生活していた面だったと考えられました。

マウンド状遺構の下からは後期の住居跡3軒、土器塚(土器片の集中部分)が発見されました。住居跡のうち1軒では、床面からシノ竹を編んで作られた炭化したスノコ状の敷物が見つかり、5本の柱穴にはクリの木と考えられる炭化した柱が残っていました。また「異形台付土器」と呼ばれる特殊な土器が完全な形で2つ見つかりました。

マウンド状遺構と発見された遺構の関係を見ると、ローム質黄褐色土がマウンド状遺構を形成する主要な土層で、それが後期の住居跡を覆っていることから、その構築時期は後・晩期あるいはそれ以降であることが判明しました。

この第3次調査の調査成果は『井野長割遺跡概報』として昭和49年に報告されました。

また、第3次調査の追加調査が1975年に実施されたのですが、その詳細はよくわかっていません。



第2次調査区住居跡出土異形台付土器

第3次調査 [平成10年(1998年) 1月6日～30日]

北志津保育園用地拡張に伴う調査で、調査区は遺跡の南側になります。縄文時代の遺構が発見されなかったことから、集落が南側まで広がっていないことが確認されました。

第4次調査 [平成13年(2001年) 2月20日～3月27日、4月5～12日、6月1～21日]

第4次調査区は井野小学校東隣の盛土遺構が最もよく残る部分とその先に続く谷の斜面、さらに第3次調査の南側のゆるい斜面部分になります。

調査は遺跡の範囲と性格を確認することを目的として、盛土の地形測量とともに、盛土の周りど台地の肩口を中心にトレンチを入れました。

まず測量の結果、大小4基の盛土遺構があることがわかりました。盛土からは後期中葉から晩期前葉の土器が出土し、盛土の外側からも同時期の土器が大量に出土しました。つぎに、遺跡の東側の谷が後期から晩期の土器を大量に含む土で埋め立てられていることがわかりました。その土の中には、ローム質土の層が認められました。

一方、盛土の内側の中央窪地には黒色土しかなく、出土した土器も晩期のものがほとんどでした。住居跡などの遺構は盛土の下や盛土の外側では見つかるものの、中央窪地では見つかりませんでした。



た。つまり、遺跡中心の窪地は

広場のような空間で、その周囲に環状にムラが営まれていた様子がうかがえます。そして東側の斜面を埋め立て平らな面を広げながら環状に盛土を造り、さらにその外側に土器を捨てていたようです(左の図)。

このほか、遺跡の南側からは「縄文の道」と考えられる溝や、その溝の横からは意図的に埋め置かれた土器が見つかりました。また、東側の谷の斜面からは大きさが2～3cmのシジミばかりが含まれる貝塚が見つかりました。

遺物は中期末から後期中葉までの土器が見つかりました。総重量は1トンを超えます。ほとんどの土器は土を盛ったり谷を埋めるときにバラバラになってしまい、接合しません。下の写真のように復元できる土器は全体から見れば少ないです。この他、破片ですが異形台付土器や吊り手土器も見つかっています。また上の写真のような土偶やミニチュア土器、耳栓(土製のピアス)のほか、土板・石剣・石棒などの

の当時のお祀りに使われたと考えられる道具も見つかっています。

このように第4次調査でおおよその遺跡の姿は見てきたものの、盛土・窪地の詳細はこの後の調査で明らかになってきました。



第4次調査出土 土偶・耳栓・ミニチュア土器・土製品



第4次調査で見つかった土器(縄文時代後期中葉から晩期前葉)

第5次調査 [平成14年(2002年) 3月1日～29日]

第5次調査区は、小学校敷地内の東隅にある「井野っ子山」と呼ばれる自然観察園内になります。現在の地形を見ると南側の校舎の方から徐々に高くなり、調査区の中央がもっとも高くなります。現在の地表面での高低差は約1mです。そして、北側に向かって低くなります。

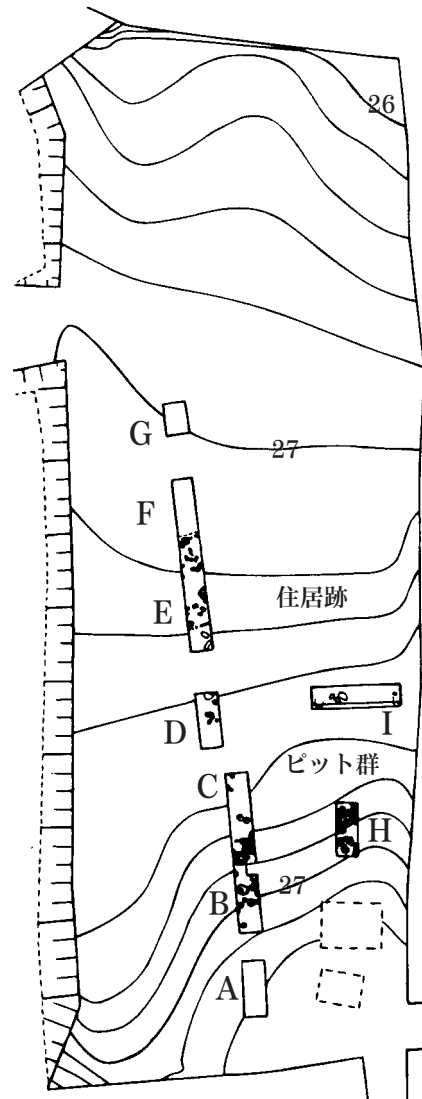
調査は、幅2mのトレンチを南北方向に8本(A～Hトレンチ)、東西方向に1本(Iトレンチ)設定して、合計111m²を調査しました。次に、盛土の中の様子、盛土の下から見つかった遺構の2点について説明します。

まず、盛土の中の様子について説明します。地表面から20cmほど掘り下げるとすぐに土器片が多数出てくる状況で、縄文時代の盛土がほとんど破壊されずに残っていることがわかりました。土器は後期から晩期のものがほとんどですが、中期のものもごくわずかにありました。土器のほか、植物質食料(ドングリ類)の加工に使われた磨石や石皿、お祀りに使われた土偶や石剣、耳飾りなども見つかりました。遺物の量は、盛土の厚さに比例して調査区の中央寄り(Cトレンチ)がもっとも多く、南にいくほど少なくなります。また、北側(Gトレンチ)は非常に少なく、住居跡や土坑などの遺構がまったくないことから、盛土の範囲をある程度推定することができました。土器はほとんどが小さい破片の状態で見つかりました。また、調査区東側の地形が一番高いところ(Iトレンチ)では、地表面から35cm下で貝塚が見つかりました。貝層の厚さは25cmから40cmほどで、いくつかの廃棄単位(ブロック)が認められました。ブロックの中には、厚さ10cm前後の灰が堆積するものもあります。貝のほとんどは海水と淡水が混ざり合う汽水域に生息するヤマトシジミで、海に生息するオキアサリやハマグリ、ムラサキガイ、マテガイなどが少量含まれています。また、貝に混じってイノシシやシカなどの動物の骨、ボラやクロダイ、エイなどの魚の骨、ウロコが見つかりました。また、貝刃を取り除くために使われていると考えられている貝刃と呼ばれる道具も見つかりました。

次に、盛土の下から見つかった遺構について説明します。B・C・Hトレンチ付近を中心に住居の柱穴とみられる穴が集中して見つかったほか、

EトレンチからFトレンチにかけて晩期の住居跡が1軒確認されました。住居はローム層とみられる茶色味を帯びた厚さ10cmから20cmの土層で覆われていました。炉に新旧関係があることなどから、一度建て替えられたと考えられます。炉の内部はよく焼けて硬くなっており、灰が多量に堆積していました。灰をフルイにかけると、魚の小骨が見つかりました。焼き魚を食べて、小骨を炉の中に捨てたのでしょうか?

このように、多くの遺物を含む盛土が非常に良く残されていること、盛土の下に多数の縄文時代の建物跡が存在することが確認されました。



第5次調査区トレンチ・遺構配置図

第6次調査〔平成14年(2002年) 11月28日〕

第6次調査区は井野小学校の給食室とプールの間になります。東西に長く設定した2本のトレンチの中央より西側で縄文時代の遺構が確認されなかったことから、この遺構のとぎれる部分が西側の盛土の外側部分と推定されました。

第7次調査〔平成15年(2003年) 3月3日～20日〕

第7次調査区は井野小学校の花壇周辺で、中央窪地範囲に当たります。調査は学校内の遺構の残り具合とその分布の確認を目的として実施されました。表土下20cmほどは学校建設によって壊されていましたが、その下には晩期の遺物を多く含む土層と後・晩期の遺構が良好に残っていました。この調査では盛土と窪地について2つの重要な成果が得られました。

まず盛土の調査成果について説明します。西側のトレンチから後・晩期の住居跡や土坑などの遺構が多数確認されたのに対し、東側のトレンチからはほとんど遺構が確認されませんでした。これまでの調査成果によると、盛土部分での遺構発見例が多いのに対し中央窪地からはほとんど遺構が見つからないことから、この西側付近が学校建設時に消滅してしまった西側の盛土の内側裾部に当たると考えられました。失われた盛土の範囲を推定する上で、これは重要な成果になります。



石剣・磨製石斧・焼けた粘土の塊出土状況

また、柱が立てられていた跡が明瞭に残る深さ180cmほどの土坑が間隔を置いて2つ見つかったこと

から、この部分に掘立柱建物跡のような建物が存在していた可能性が考えられました。同じ土坑の上部からは、石剣・磨製石斧・焼けた粘土の塊がまとまって見



調査区西側遺構集中部分

つかりました。いずれも火を受けていることから、火を使ったお祀りが行われていたのかもしれませんが。

次に中央窪地の調査成果について説明します。中央窪地に相当する東側のトレンチでは、表土下からローム層にかけて黒色土が良好に堆積しており、晩期前葉を中心とする土器が多量に出土しました。しかし、上述したように遺構はほとんど確認されませんでした。この黒色土に覆われたローム層をさらに1mほど掘り下げて土層の堆積を観察したところ、掘り下げた部分のローム層がVI層以下の層にあたることが確認されました。つまり、中央窪地のローム層は通常のローム層よりも50～60cm低くなっているのです。



中央窪地深堀部分土層堆積状況

これまでの盛土部分の調査成果を考え合わせると、縄文時代の人々が中央窪地のローム層を意図的に削ってそれを盛土として利用した可能性がさらに高まったといえます。

第8次調査〔平成15年(2003年)8月1日～29日(予定)〕

第8次調査区は、第7次調査区の西側で、学校建設時に消滅してしまった西側盛土の範囲内に当たると考えられます。この調査は第7次調査で見つかった2つの大きな土坑の性格を探ることを主な目的として実施されました。また、第6次調査でおおよそ推定された西側盛土の限界部分まで調査区を拡張して遺構の分布を確認しました。第7次調査区と同様に、表土下20cmほどは学校建設による造成を受けていましたが、その下には縄文時代の遺構が良好に残っていました。

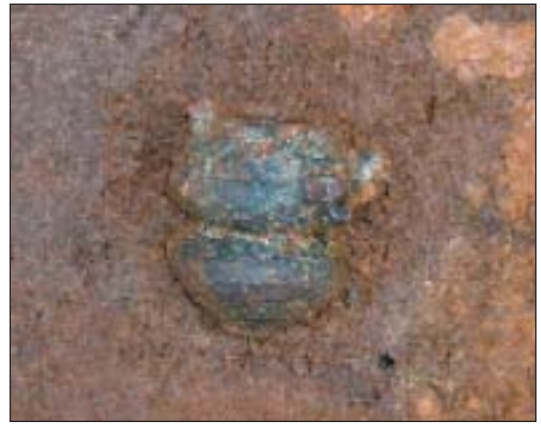
今回の調査は、調査対象面積の半分と拡張部分を合わせて約600㎡全面を掘り下げたことにより、遺構の広がりが捉えられました。

調査区全体を見ると、調査区の北西から南東にむかって遺構がほとんど確認されない帯状の空白部分が認められ、その空白部分をはさんで、北側にピット(小さな穴)群が確認される一方、南側では土坑(大きな穴)群が認められました。

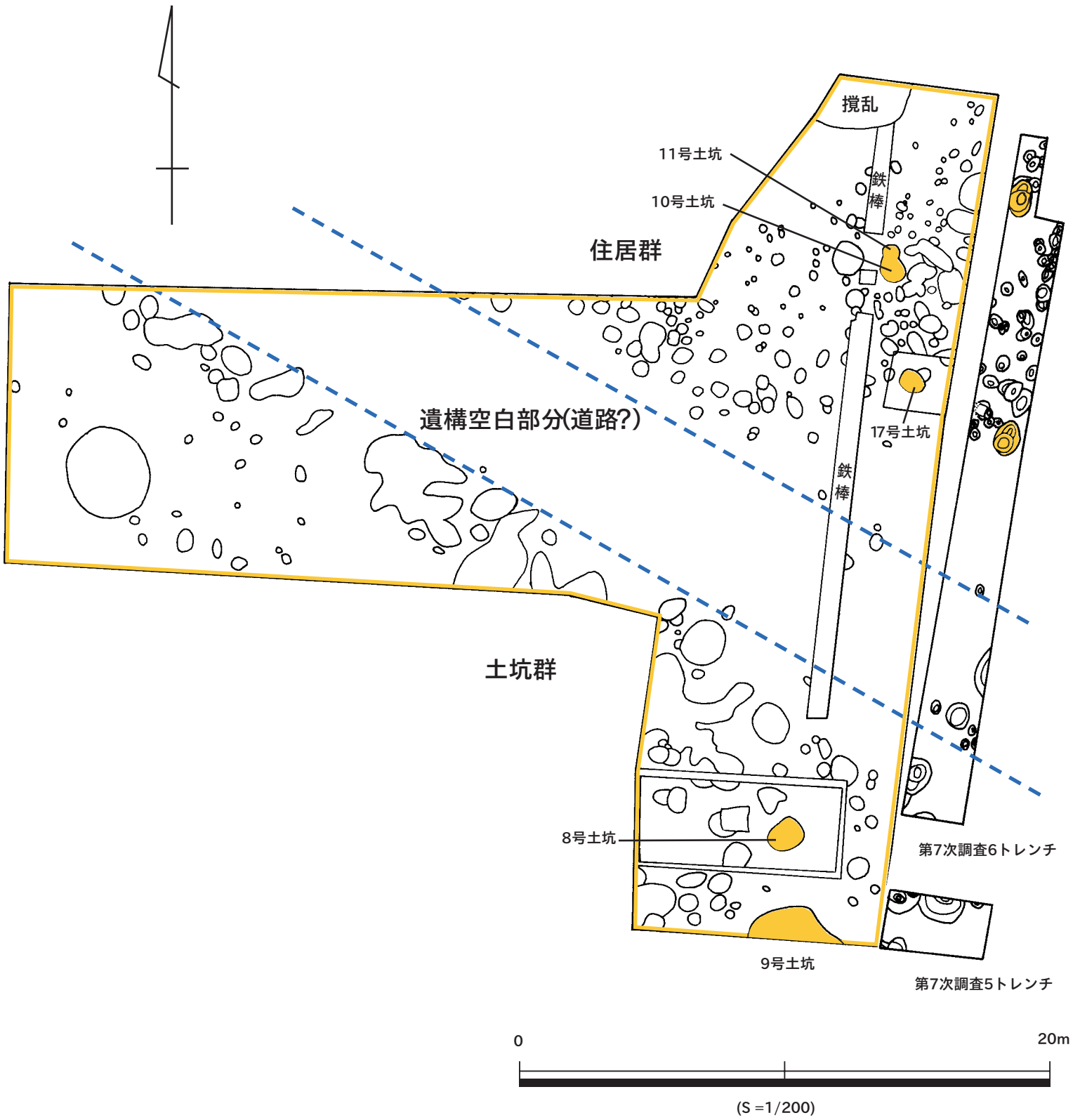
北側のピット群は住居の柱穴と考えられます。縄文時代の人々が生活していた面は、遺構が確認された面よりも高いところにあつたのですが、その部分は学校建設時に削られてしまいました。そのため、深く掘り込まれた柱の穴だけが確認できる状況になっているのです。このピット群の中で注目されるのは、深さ180cmにもなる深い柱の穴が2つ確認されたことです(10,11号土坑)。第7次調査区でも同様のピットが2つ確認されており、それらがほぼ一定の間隔に位置しています。これらは形状や出土する土器片がほぼ類似することから、何らかの建物を形成する柱の穴と考えられます。

一方南側の土坑群は、貯蔵用の穴あるいは墓穴と考えられる土坑で、一見すると非常にいびつな形をしているのですが、少し掘り下げると複数の土坑が重複していることがわかりました。南西側の土坑は円筒形の大きな土坑で底面の中央に小さなピットが掘り込まれる特徴が認められます。これらの土坑はどれも深く掘り込まれているのですが、中でも9号土坑は深さ3m近くにもなる非常に深い土坑と考えられ、中ほどからは後期末葉の瓢形の注口土器(ひょうたんのよう^{ひさごがた}な形をした、注ぎ口の付く土器)がほぼ完全な形で出土しました。一方北西側に向かうにつれて土坑の形が楕円形に変わっていくようになります。

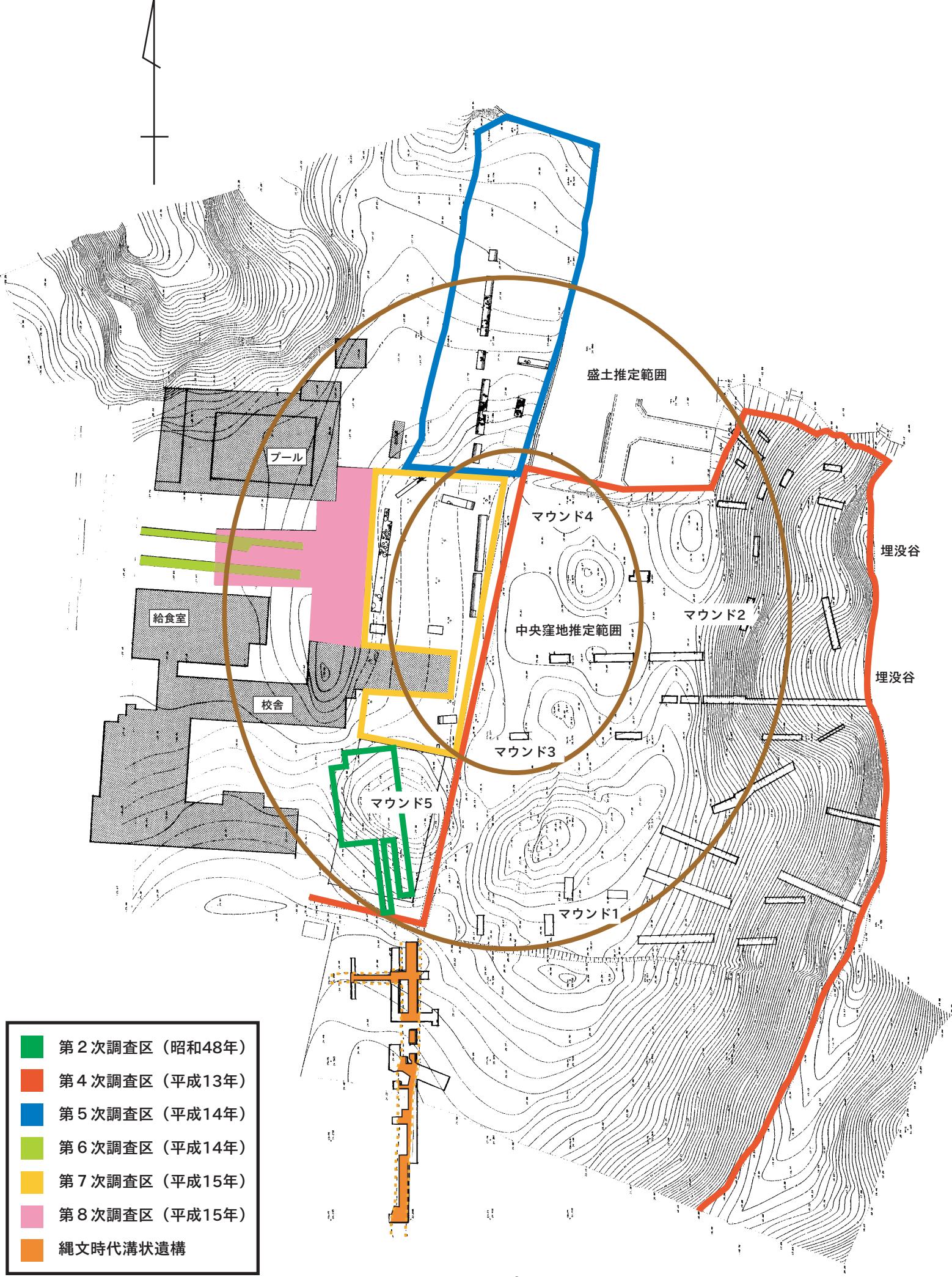
面的な調査により、上述したように遺構の空白部分をはさんで住居群と土坑群が展開するという遺跡の構造の一端が垣間見られました。盛土部分での遺構確認例が多いことから、遺構の空白部分をはさんで南北に独立した盛土がつくられた可能性も考えられます。また、遺構空白部分を北西側に追いかけていくと、谷に至るように考えられることから、この帯状の空白部分は谷から集落へ通じる「道」のような役割を持っていたのかもしれませんが。遺跡の南側でも、南側の谷から集落に通じると考えられる溝状の遺構が確認されています(第4次調査)。この溝状遺構も「道」と考えるならば、この集落にはこのような谷から集落へ通じる道が何本かあって、盛土をつくった縄文時代の人々はその道を行き来していたのでしよう。



9号土坑出土瓢形注口土器



第8次調査区遺構確認図



- 第2次調査区 (昭和48年)
- 第4次調査区 (平成13年)
- 第5次調査区 (平成14年)
- 第6次調査区 (平成14年)
- 第7次調査区 (平成15年)
- 第8次調査区 (平成15年)
- 縄文時代溝状遺構



井野長割遺跡全体図

(S=1/1200)